

日本人GKと各地域別GKの基礎技術の違いに関する研究  
 A study on differences of basic skills between Japanese goal keeper and the others  
 —2010 FIFA ワールドカップ 南アフリカ大会を例に—  
 1K07B176-3 蛭間 公平  
 指導教員 主査 作野 誠一 准教授 副査 堀野 博幸 准教授

【序論】

2010FIFA ワールドカップ南アフリカ大会における日本人選手の活躍は記憶に新しい。その中でも、一際輝いていたのが、再三スーパーセーブを連発し、日本のゴールマウスを守り続けた川島永嗣選手である。ゴールキーパーはサッカーというスポーツの中で、特殊なポジションであり、身体能力の差がゴールキーパーの技術に影響すると言われるが、今大会の川島選手のようにアジアという体格では決して有利とは言えない地域からも FIFA の貢献度ランキングに選出された。そこで本研究では、2010 年南アフリカワールドカップを例に、各地域別のゴールキーパーの技術に差があるかを比較し、今後、日本人のゴールキーパーが世界で活躍できるかについて検討することを目的とする。

【研究方法】

2010 年 6 月 11 日から 7 月 11 日にかけて、南アフリカ共和国で開催された第 19 回 FIFA ワールドカップのグループステージ、のべ 32 試合において VTR に撮ったものを使用した。そして各分析項目を自作の記録用紙に記録した。分析項目は大きく分けて 2 つである。1 つ目はシュートに対するリアクションであり、これは正面・正面付近のキャッチング成功率と体の中心線から外れたシュートに対する反応の 2 つに分類した。2 つ目はディストリビューション（ゴールキーパーが味方選手へボールを配給すること）の方法と正確性である。これはオープンプレー、セットプレー（ゴールキックやフリーキック）の 2 種類に分類した。その中で、オープンプレーに関しては、保持時間、ディストリビューション方法、ディストリビューション先、成功・不成功という 4 項目で分類した。セットプレーに関しては、ディストリビューション先、成功・不成功という 3 項目に分けた。

【結果と考察】

今回、シュートに対するリアクションとディストリビューションの方法と正確性について分析したところ、どちらにおいても日本・韓国のアジア 2 カ国とヨーロッパ 3 カ国は対照的な結

果を示した。シュートに対するリアクション数では正面・正面付近のシュートに対するミス率で、0%か否かという点で、やはりヨーロッパのゴールキーパーの方が技術的に一步リードする結果を示した。また、ディストリビューションの成功率においてもオープンプレーとセットプレーのどちらともヨーロッパ 3 カ国の選手の方がアジア 2 カ国の数値を上回る結果となった。しかし、これはヨーロッパのゴールキーパーはディフェンディングゾーンへのディストリビューション率が高く、アジア 2 カ国は相対的にアタッキングゾーンへのディストリビューション率が高いことが要因として挙げられる。つまり、ヨーロッパ 3 カ国とアジア 2 カ国は現時点で各々のチームに適したディストリビューションを選択していると考えられるため、成功率のみで議論することはできない。今後、アジアのチームが、ヨーロッパや南米といったサッカー強豪国に引けを取らないだけのボールコントロールスキルを、ゴールキーパーを含めた 11 人の選手がフィールド上で体现できるならば、その時にはアジアのゴールキーパーの戦術も変わっているのではないかと推測される。

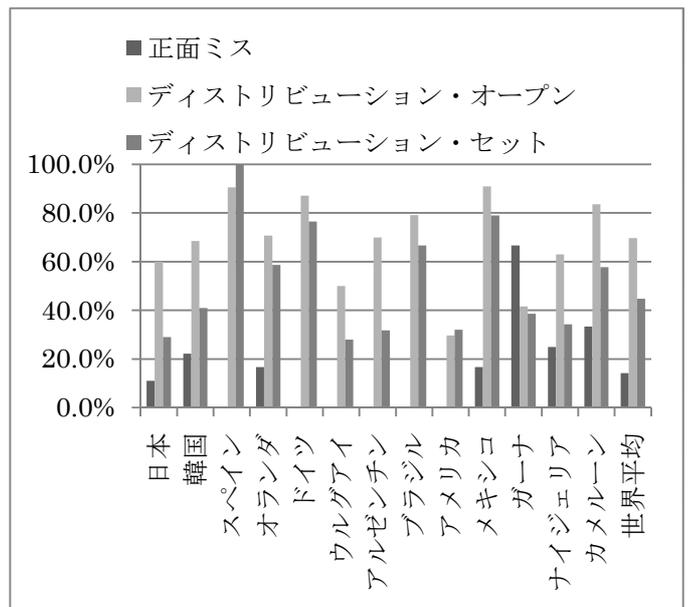


図1 各国のキャッチングミス率とディストリビューションの成功率